

中国の近現代史から見た人種

はじめに

中国の歴史のなかで人種というものがどのように考えられたのか?(配布資料あり)

人種という概念は定義が不可能で実在しないもの⇒これまでの何回かの授業で強調されてきたはず

しかしながら、中国の近現代の歴史にひきつけてみると、かつては間違いなく「ある」と信じられ、その信念にもとづいて人々が行動し、成立した時代があった。

1. 中国における人類学成立事情を反映する興味深い事件

- ・2002年に北京大学社会学系の王銘銘(Wang Mingming)教授が、欧米の人類学者の学術書を無断盗用して、自身の中国語の著作を出版していたことが発覚。中国で最も権威ある学府に勤務する教授の信じがたい行ないに、国内で物議の種となったが、王教授は今日も北京大学につとめている。

⇒この事件の背景には、20世紀初頭以降、欧米→日本→中国という図式において社会学や人文地理学、考古学、心理学、人類学といった西洋型の新しい学問が中国に入り、横文字を縦にするという学問形態に汲汲とする時期を経るなかで、このような「新学」が中国で成立するようになったという事実がある。

- ・日本は明治の頃に欧米の概念が入ってきた→日本経由で漢字に翻訳された概念が中国へ輸出されていった。例) 社会、経済、→生計、理財
世民

- ・中国の近代の学問は、このように西欧の学問が、いったん日本で消化され、理解され、漢字にのって輸入されたもの。→王教授の盗作はこのような参照を重ねる学問様式の流れを象徴するものとしても捉えられる。

2. 西洋の学問に依拠した人種概念

- ・日本で、西洋型の人種の分類にのっとるようになったのは明治に入ってからだが、1838年の渡辺華山「慎機論」などを見ると、かれらが西洋の学問体系をある程度知っていて、人種に関する知識、たとえばリンネの7種の分類についても知っていたことがわかる

- ・『百科全書 人種篇』（京大にも所蔵）⇒西洋の百科事典の翻訳（明治のはじめ）

ブルーメンバッハ（西洋の人類学で著名な学者で）の人種分類を紹介

[白人、モンゴル人（黄色人）、マレー人（肌褐色）、黒人、紅人]

- ・レツィウスが考えた頭指数という考え方も紹介されている。

- ・西洋の書籍の翻訳であるため、西洋の枠組みにおける人種概念や人種にともなう偏見をもひきずっていた。

- ・ヨーロッパ人が偉くて、有色人はなんとなく劣っているという感覚が、すでにこの頃から学校教育に入ってきていた。

- ・形質人類学

頭のかたちや身長など、さまざまな計測をおこなって人類を分類していく学問。

当時の人類学の主流は文化人類学ではなく、形質人類学であった。

⇒日本での代表的な学者：坪井正五郎、鳥居龍蔵

鳥居龍蔵

アジアをフィールドワークしてそこにいる現地の人々を計測

中国の満州族に対して人種学的特長に言及

- ・1898 清朝で大きな改革をやろうという動き（戊戌の変法運動）

リーダーは康有為、梁啓超（100日ほどで失敗 日本に亡命）

- ・1892 『格致彙編』の「人分五類説」（ブルーメンバッハの分類）

*格致＝science に対応する漢語。「科学」という語は、「科举」という主に受験勉強をさす言葉の影響で、当初なかなか中国で受け入れられなかった。かわりに格致という言葉が、様々な事柄、現象の本質を究明していくという意味で好まれて使われた。

- ・唐才常（康有為、梁啓超と共に活動）の「各国種類考」『湘学報』15-27号, 1897.9-1898.2 は、岡本監輔『萬国史記』（漢文で書いてある日本人による書物）を参照している

- ・1898年の状況

弱体化する清を列強諸国が食い物にしようとしていた時期

→このままでは中国人が減びてしまう。どうするか？

弱体化した中国の政治体制、社会体制を改革を通じてドラスティックに変えていこうとする試みが知識人によっておこなわれた→「保国」、「保種」という種族を守れとい

う考え方。

- ・唐才常→人種も植物と同じく、融合すれば、改良される
人種の優劣があるということを認めて、通婚によってより高いレベルの人種を目指そう、西洋の人種との通婚を認めて、黄色人種を改良していこうという考え方。

↓

このように考えるのは唐才常のみではなかった。

- ・薛福成（清末の外交官）
ネイティブアメリカンのなかにも通婚によって西洋人化した例があると紹介。そのうえで、たとえ土番（野蛮）でも、何とか自立したインテリア商人クラスは西洋人と結婚したことによって、よくなったと述べている。
 - ・唐才常
南洋(東南アジア)に中国人が出かけて行って、現地の人々と雑婚→その子どもたち（クレオール）には優秀な人が多いと紹介。
 - ・梁啓超（非常にかしこい人、当時の中国の言論人の代表格→あらゆる学問を紹介）
「脳之角度」→頭指数
「血管中之微生物」→血液型
ラントシュタイナーの血液型の発見(1901)以前にも、具体的な根拠はないまでも、なんとなく血が分けられるらしいということはわかっていた。
- * 1896, 1897 年当時、西洋の科学的知識をききかじって、自分なりの世界の人種分類の議論に結びつけようとしていた。

* 梁啓超の湖南時務学堂での教育指導（1897）

学生たちと質問やそれに対する答えを添削ノートの交換を通じてやりとりしていた。

Q.原始時代に人間ではないものから人間が生まれたというなら、古代にいたという奇妙な生き物（『山海経』という書物に登場）は嘘ではないのではないか？

A.人類は獣から進化してきたもので、アフリカのひとびとは猿から進化して間もない。進化すればのちのち肌の色は黄色になり白になる。

↓

皮膚の色の違い＝進化の度合いとまじめに考えていた。

3. 排満革命

- ・漢族が、当時中国を支配していた満州族の王朝を倒すということ
「漢族という人種によって、満州族という人種を倒せ」というスローガン

- ・清朝体制のもとでは、満州族と漢族の通婚は禁止されていた。
- ・普通は見かけでは区別がつかない漢族と満州族。
それでも、革命をしようとする側からすれば、両者を分ける必要性があった。
- ・鄒容（革命派）
当時 20 歳にも満たない青年革命宣伝家、日本への留学経験あり
1903 年に『革命軍』というパンフレットを発行し、当時もとてもよく読まれた。
第 4 章「革命のためには人種を区別しなければならない」
アジアの黄色人種→1) 中国人種→漢族
→チベット族
→交趾支那族（インドシナに住む人々）
2) シベリア人種→日本族
→蒙古族
→ツングース族（満州人）
→トルコ族
- ・漢族と満族は人種的に別系統ということを繰り返し、パンフレットのなかでアピール
しかし、この分類法は鄒容のオリジナルではなく、京大の東洋史学科に所属していた桑原隲藏の学生向けの教科書『中等東洋史』からアイデアを得たもの。
- ・梁啓超「新史学」（1902）に見える人種分類ツリー図 →浮田和民の著作からの盗作
- ・梁啓超（改良派） 清朝を保ったまま、中身を大きく変えよう（批判も多かった）
- ・孫文（革命派） 清朝をつぶさないかぎり中国はよくなる
⇒両者とも日本で活動。
- ・日本の歴史学、東洋学が提示した人種に関する「科学的」な説が、中国の政治運動に影響をあたえていた。
- ・『民報』（中国革命派の組織である中国同盟会の機関紙、1905 年に日本で創刊）と梁啓超らの論戦：
清朝温存派の改良派の梁啓超は、漢族と満族の人種の違いを強調した革命派とちがって、漢族と満族は血が違うのではなく、文化が違うのだと述べて、「民族」の違いを強調。
- ・民族的な定義、社会学的な定義でいうならば、満族も漢族も同系統なのだと主張。

結論:

「人種」が間違いなく存在するというある種の偏見に支えられた言説、思い込み、ものの考え方は、確かに今日から見れば、否定されるべきものだが、近代初発の時期においては広く通行していた。人種についてのステレオタイプの考え方が西洋→東洋を貫通して参照され続けたわけであるが、逆に、それは双方の対話（東アジアにおける西洋思想の摂取）が成立する上での共通言語になったという側面も否定できない。